

概要

私たちの住む街なかの「魅力資産」の再発見とユニーク活用アイデア（瑞穂区・熱田区）

伊藤 文隆、北野 あすか、長尾 哲男、永田 高志

市民研究員第3グループは「まちの小さな魅力空間、水辺・みどり・神社・地形などの美しい風景の再発見」、「地域コモンズの継承」、「オープンスペースのより身近な活用提案」をキーワードとし、瑞穂区・熱田区の現地調査と文献調査を行ってきた。

第1章では瑞穂区・熱田区の地域特性と名古屋市における地政的な位置づけを社会経済的な生活環境指標データを中心に明らかにする。熱田神宮や瑞穂運動場の集客力、名古屋国際会議場、名古屋市博物館などの既存観光・文化施設資産の魅力再発見と生活環境面からの重要性について市民アンケートも引用して概説を行う。特に第5節では、都市における街並み・街かどの景観保全や地球温暖化防止の観点から市街地地区の「みどり」の存在価値の重要性を述べる。都市化の進む地域では従来からの旧住宅地が共同住宅に建て替えられ、均一で殺風景な景観に変貌してしまっている。そこで都市部のヒートアイランド現象を和らげ、地域に住む人の落ち着きと潤いのある生活のためにも「緑地」の現状と身近な事例を紹介し、必要不可欠な魅力資産としてみどりの維持と保全について提案する。

第2章では台地と坂道が織り成す空間が主に魅力的な視覚変化をもたらすことを述べる。

第3章では小さな神社を中心に集落・コミュニティが作られ守られてきたと同時に神社の緑が街の快適さを作っていることを述べる。神社はその地区の行事や人々、街と関わりが深く興味深い。

第4章では古くから旧東海道を中心に繁栄してきた瑞穂区・熱田区の街道の道しるべに注目して、生活道路と幹線道路における現代の生活に安全・安心と周辺情報をコンパクトに伝える歩道のストリートファニチャー（街具）に関して提案を行う。山手グリーンロード沿いの「ほっと」するストリートファニチャーや小さなみどりの空間を熱田神宮まで延長した街並み整備を計画し、「新まちなか散策ルート」を提案する。また周辺で発見したわくわく・ドキドキ、ほっとできる小さな空間の様子を紹介する。

第5章では街の中の小さなコミュニティ空間を探す。このような空間では誰もが人の温かさを感じて何となくほっとしたりわくわくしたりするものである。具体的には路地や商店街の中にあるオープンスペースや街かどの楽しい仕掛けなどを取り上げる。コミュニティという住民が集まって何かをしなければいけないと思いがちであるが、必ずしもそうではなく、同じ文化や生活を共有してきたという思いを持っていることから生まれる仲間意識であり、それらは過去も未来も人の心の中に継続して存在する。そのためにはコミュニティを感じるができる空間が身近にあることが必要であると思われる。そこで、街で見つけた小さな魅力資産を活かして、閉鎖的になりがちな路地のプライバシーを守りつつ、もっと開放的に住民と住民以外の者たちが気軽にふれあえる「今どき路地」、子供も大人も道行く人も楽しむことができる「お絵かき広場」、路地の辻が街かどの出会いの広場になる「広場みち」などを提案する。これらは瑞穂区・熱田区以外にも応用できる小さなコミュニティ空間であり、しかも各地それぞれの魅力資産を活用することができるものである。

第6章では空店舗や空地を地域のコミュニティ快適空間として活用し、どの世代にも魅力的な「昭和の魅力まちづくり」作戦を提案する。瑞穂区雁道町界隈の昭和の街並みや香りが残る市場や商店街を例として、商店街の空店舗や空地を利用し、子供からお年寄りまでが楽しめる「昭和の雑貨屋・駄菓子屋」や「屋台村」、「ものづくり工房」などが軒を連ねる「昭和のまち」を計画する。「昭和のまち」ではラウンジや道路で人々が出会って集い、自動車の代わりに自転車タクシーが走るなど、安心安全な楽しい街の様子が繰り広げられる。

第7章では街中の癒し空間について述べ、特に水の癒し効果を活用し堀川の親水空間を提案する。喧噪の現代都市の中で人々が 憩い・潤い・開放感 を感じることができ、その場所に佇むと「ほっと」できる空間をアメニティスペース（快適空間）こそが都市空間における魅力資産の一分野であると考えられる。私的空間と公共空間の中間に位置する共有空間（コモン空間）には 路地・オープン外構・セミオープン外構 と呼ぶものがある。そこで瑞穂区・熱田区の中でこのようなアメニティスペースを探索し、その魅力をより増幅させるための分析・検討を行うことから街づくりの手法を提案する。また、都市の快適空間としてオープンスペース（神社・公園・緑地・森林・河川・水辺等）はよく知られている。瑞穂区・熱田区内には山崎川・天白川・新堀川・堀川の4河川が流れており、その中で名古屋の発展上「母なる川」といわれる堀川に直接面している（他にはない）公共用地である3公園（白鳥・大瀬子・宮の渡し）について検討を加える。これらの地は江戸時代もしくはそれ以前より、それぞれ貯木場・魚市場・宿駅として重要な役目を担ってきた。しかしその面影・記憶を将来に繋げるものとして十分に利用されているとは言えない。また、水辺にありながら川を遠く風景として上から眺めるだけになっており、これをもっと身近な存在として活用するため、それぞれに「木と水の記憶」・「魚市場の記憶と水音」・「集いの場」というテーマを設けて計画案を提案する。堀川の浄化は近年様々な試みがなされている中、本計画にあっても浄化の一端を担えるものとする。

最後に第3グループが提案した未来の「わく ドキ ほっ」空間と再発見した瑞穂区・熱田区の魅力資産をリストとマップで紹介する。

本報告書は小さな空間が持つ温かさ・優しさ、みどり・水辺が持つ癒し・快適さ、地域コモンズが継承されることを願うものである。



昭和の魅力まちづくり作戦